

三村先生の作り出した共同体としてのゼミの素晴らしさ

武内 裕 明

(弘前大学)

The Greatness of the Seminar as a Community Created by Prof. Mimura

Hiroaki TAKEUCHI

三村先生、ご定年おめでとうございます。三村先生が広島大学にいらっしゃって以来、大変お忙しい日々を過ごされていたことと思います。それにも関わらず多忙を極めるなか、日々の仕事や研究に加えて研究指導なども精力的に行なわれていたこと、どれも当時から頭の下がる思いでしたが、「軽々と」こなしているように見えていたそれらの難しさと過酷さを大学教員になって改めて知り、なおさら驚いたことを記憶しています。

修士までを別の所属で過ごしてきた私にとって、吉富先生と三村先生が指導した当時の音楽教育学のゼミは、大学という場所や教育に関するイメージを一新する場所でした。それまで辛い研究を行う孤独な場所というイメージであった大学は、それぞれが研究に邁進しつつも協力し合い、日々を共にするコミュニティというイメージに変わりました。だからこそ、三村先生の指導下で過ごした時間は、学生・院生時代のもっとも幸せな時間です。今でも三村ゼミは故郷のような場所です。しかし、決して院生生活が楽だったわけではありませんでした。管理が徹底される今の大学ではおおよそ難しいのかもしれませんが、例えば当時のゼミは毎週午後6時頃に始まり、遅い時には日を跨ぎ午前1時頃まで熱心に研究指導が行われていました。それでもゼミでの時間は幸せなものであり、苦しかったという記憶はありません。

決してのんびりとしたと言い難いゼミだったにも関わらず幸せな時間だと感じられる部分に、先生の作り出す雰囲気の影響していたことはまちがいありません。まず、その基盤には教員と学生が共に公私を共にするということがあったと思います。三村先生には、ゼミでのレクリエーションや懇親会などをはじめとして、お忙しいなかでも研究指導ではない部分でもたくさんの時間を割いていただきました。研究発表に向けての時間は厳しいものでしたが、三村先生やゼミの仲間と一緒に発表に向かいお互いに助けあうことは、苦楽を共にし、先生の庇護下にあるという安心感によって守られた共同体的雰囲気のなかではごく自然なことでした。また、指摘や疑問を挿みつつもこちらの見解にも耳を傾け、意見を聞いたうえでそれを活かして改善の方向性を示すという、三村先生の研究指導の方法も人を育てるものだったと痛感しています。未熟で研究対象の背景に関する情報を知らない故の誤解や拙い説明も多々あったと思いますが、そのような見解でも耳を傾け、説明を聞いたうえで「今言ったように書いたら」と否定することなく改善の方向を示していただいた時間から、どれだけ研究論文の書き方を学べたことか、感謝してもしきれません。

仲間と切磋琢磨するなかで共に育ちあうゼミの雰囲気は、どのような先生にでも作ることでできるものではなかったと思います。少なくとも、その雰囲気は3つのゼミを経験した学生時代には他になかったものでした。今になって思えば、それは先生の個人としての生活や家族との時間を大幅に奪うものになっていたはずですが、指導を受けていたころから自分の論文の作成を断念して学生指導に当たっている姿も目にしてきましたが、後進の育成は三村先生個人としての研究面でも負担となっていたはずですが。

「先生」への尊敬というのは、目に見えなくても卓越した技術と、犠牲をものともせずケアしてもらえているということが伝わるからこそ生まれる感情なのでしょう。三村ゼミの一員であれたことを本当に幸せに思います。今後はぜひご自分の時間も大切にされてください。本当にありがとうございました。